

# 「倭寇」と海洋史観

## －「倭寇」は「日本人」だったのか－

秦 野 裕 介

### 1 海洋アジア論における倭寇理解

近年日本中世史においても「対外関係史」の研究が盛んである。「対外関係史」というよりも、「アジアの中の日本史」というべきかも知れない。それも「日本」という枠組みを越えた議論が次々と提唱されている。その多くが「陸地史観」の克服という形を取りながら、アジア海域内の交流関係を解き明かすという手法を取っている。例えば経済史の立場からは浜下武志氏や川勝平太氏に代表されるいわゆる「海洋史観」に基づく研究が近年脚光を浴びている。一方、田中健夫氏を中心とする前近代対外関係史研究会において、この二十年積み重ねられてきた実証的な研究グループの中でも、中世史では村井章介氏による一連の「アジアのなかの中世日本」論、さらには村井氏・石井正敏氏・荒野泰典氏という前近代対外関係史研究会のメンバーを中心とした『講座 アジアのなかの日本史』全六巻（東京大学出版会、一九九一年～一九九三年）などの議論が積み重ねられてきた。

近年のアジア研究の隆盛について川勝氏、浜下氏、杉原薫氏の座談会の司会を務めた山下範久氏は「最初、アジアというキーワードが出るということがそもそも意味があった<sup>1)</sup>」と十年前の学会の状況を総括したが、山下氏の発言をもじるならば、この段階のアジア論は「海というキーワードが出るということがそもそも意味があった」ということができるだろう。例えば網野善彦氏の海民論<sup>2)</sup>は明らかに「海」から「陸」を相対化するという意義が存在したし、白石隆氏の「マンダラ国家論」「海のアジアと陸のアジア」<sup>3)</sup>という議論もやは

り陸地史観を相対化し、従来の歴史象を転換することを意図したものであろう。しかし現在はそれで十分だろうか。もはや「海」というキーワードで歴史象を相対化しうる時期は終了しつつあると考える。「海に開かれた日本」というキーワードはもはや国家主義的な歴史象を相対化する有効な概念ではない。それは「海洋国日本」の繁栄を願う国民の休日である「海の日」制定という事実に明らかだろう。「海の日」に収斂されない歴史象をどう構築するか、ということが今後「海洋アジア論」を議論する上で重要であると考えられる。

ここでI.ウォーラステインの世界システム論に対する批判として提出されたA.G.フランクの『リオリエント』<sup>4)</sup>におけるアジア論の基本的なスタンスを見ておきたい。フランクは「商業取引の地金による決済(お望みなら「朝貢」と呼べばよい)と朝鮮・日本・東南アジア・インド・西アジア・ヨーロッパおよびその経済的植民地との、さらにその間の中心-周辺関係とが、十八世紀を通じて世界経済の中心的な役割を果たしていた」とまとめている。フランクが「商業取引の地金による決済」を「お望みなら『朝貢』と呼べばよい」とまとめた<sup>5)</sup>ことは、朝貢体制を中心にアジアシステムを考えようという意思表示であろう。

ここで「朝貢」(広義の)という概念だけでアジア域内交流の全貌が明らかになるのであろうか、という疑問が出てくるだろう。つまりは「朝貢」「冊封」というものに付随する取り引きだけで十分だったのだろうか。むしろ多様な域内交流のネットワークはなかったのだろうか、という問題が浮上してくるのである。無論フランクも「朝貢」という言葉を単に中華帝国と周辺諸国との進貢-回賜関係のみで捉えているわけではなく、民間の交易も検討しているのはいうまでもない。また浜下氏も「朝貢システム」という言葉で進貢-回賜関係のみを捉えているのではない<sup>6)</sup>ことも明白である。それだけになおさら「進貢-回賜」関係に収斂されない「密貿易」の実体はどうなっていたのか、という問題が気になってくる<sup>7)</sup>。しかし「密貿易」は明らかにならないからこそ「密貿易」なのであって、どれだけ史料に残っているか、という問題が出てく

るだろう。そこで「進貢 - 回賜」関係、朝貢体制に対する反逆として登場してきた「倭寇」はどのように位置づけられているのだろうか、という疑問も湧いてくるであろう。

まず川勝平太氏が倭寇について「環シナ海域を舞台に日本人（だけではなく）は暴れ回った」といっている<sup>8)</sup>。川勝氏は日本人だけではない、という但し書きをつけてはいるものの、基本的には倭寇を「日本人」として把握していることがうかがえる。小林多加士氏はさらに詳しく倭寇の状況について議論している。氏もまた「もちろん、倭寇は日本人にはかぎらない」と保留をつけながらも「中国と日本の明暗を分けた基本的要因は、ほかならぬ東アジア「世界 = 経済」のマージナルな海商として活躍した倭寇の活動を日本は巧みに体制内に取り込みつつ制御したのに対して、中国はそれを体制外に放り出し排除していたことにあるように思われる」と倭寇の活動が日本の体制内に取込まれたことが日本の経済発展の原因になっているとまで評価するのである<sup>9)</sup>。

また川勝氏は日本の指向性として海洋指向と内陸指向の時代を交互に繰り返すというパラダイムを提唱している。川勝氏によれば奈良・平安・鎌倉・江戸時代は内陸指向であり、奈良以前、室町、明治時代以降は海洋指向だということである。そして海洋指向の時代の末期には白村江・秀吉の朝鮮出兵・太平洋戦争の敗北を経験し、海外からの撤退を余儀なくされ、海洋指向から内陸指向へと転換した、としている。川勝氏は元の日本遠征の失敗によってシナ海の制海権を失い、倭寇が跳梁する海洋指向の時代が訪れたとする。そして秀吉の朝鮮出兵の失敗と、それに続く関ヶ原の合戦において海洋指向の西軍が内陸指向の東軍に敗れるに至って海洋指向の時代は終焉したとする<sup>10)</sup>。

しかし倭寇の「倭」は果たして「日本」なのだろうか。倭寇は「日本人」主体という認識で問題ないのだろうか。答えは否である。十六世紀の倭寇は双嶼諸島を中心とする中国南部の多島海を本拠とする海上勢力を主力としていた、というのは『明実録』編纂のころから常識であり、近年では十六世紀の倭寇を「後期倭寇」と定義して、ほとんどが「中国人」であったと結論づけている<sup>11)</sup>。

ということは、十六世紀において海洋指向であったのは川勝氏のいうように日本ではなく、むしろ中国だったということになるのではないだろうか。倭寇をもって日本の海洋指向を論じるのは少し無理がありそうだ。

ただ問題は「日本人主体」と定義されている十四世紀後半から十五世紀前半の倭寇である。確かに元が日本遠征や爪哇遠征の失敗によって、シナ海の制海権を失った間隙を縫って日本列島上の勢力による倭寇が跳梁し、それが秀吉の出兵まで実はつながっている、という議論は後半の、倭寇と秀吉を無媒介に結合している部分に問題は残るが、前半の、元の制海権喪失の間隙を縫って倭寇が跳梁したという話はあるような感じもしないではない。ただ彼らを日本の海洋指向の担い手とするのはどうだろうか。網野善彦氏が姜尚中氏との対談の中で「『倭寇』を日本国が支援したことはなく」「『倭寇』は国境を越えた海の世界の問題」と発言している<sup>12)</sup>が、そうだとすれば「倭寇」は日本の海洋指向の担い手という評価も見直されるべきであろう。

## 2 「倭寇」はどのように考察されてきたか

ここでは「倭寇」とは従来どのように考えられてきたかを少し振り返ってみたい。「倭寇」という用語はもともと朝鮮・明で使用された言葉である。そしてその実体について、明・朝鮮時代よりさまざまな考察が積み重ねられてきた。

まずその第一は倭寇を日本人の海賊行為とみなすものである。明清代以来の中国や朝鮮以来の韓国（朝鮮民主主義人民共和国ではどのような研究がなされているかは不勉強にして知らない）における倭寇研究はおおむねこの方向で進められてきたし、日本においてもそれを評価するにせよしないにせよ、そのように見てきた。

しかし一方で早くは明代末の『籌海図編』<sup>13)</sup>に見られるように、倭寇の主体は中国人であるという認識も存在した。『籌海図編』の認識は後に「後期倭寇」

と呼ばれる概念を作り出すことになる。「後期倭寇」とは嘉靖の大倭寇を中心とする、中国人主体の密貿易集団であるという認識である。そして十六世紀の「後期倭寇」という用語に対して十四世紀以前の「前期倭寇」という用語が作り出されることとなった。「前期倭寇」とは高麗末から朝鮮初期に発生したものでこれこそが日本人の海賊行為であると認識されてきたのである。さらに田中健夫氏は『倭寇』<sup>14)</sup>の中で「前期倭寇」と「後期倭寇」とは全く性質の異なるものであり、これらを「倭寇」という一つの概念でくくることを不当として「十四世紀の倭寇」「十六世紀の倭寇」とこの両者を弁別すべきことを主張した。田中氏のこの著作によって「後期倭寇」という概念は完成したと言ってよいであろう。

ところが日本人主体の倭寇と中国人主体の倭寇を弁別した当の田中氏によって、倭寇研究は大きな転機を迎えるのである。田中氏は「李順蒙上言」における「倭人不過一二」という文言<sup>15)</sup>や『高麗史節要』の水尺・禾尺・才人の参加という記事、倭寇の回数や規模の大きさの検討から、これらの集団の全てが日本から渡海してきたと考えるのは無理があり、むしろ高麗人が主力ではなかったかと論じたのである<sup>16)</sup>。しかも高橋公明氏は田中論とは全く別個に倭寇の構成主体を検討し、そこに濟州島人の関与を見出した<sup>17)</sup>。期せずして同じ時期に同じ論旨の論文が全く独立して発表されたことはこの後の倭寇認識に大きな影響を及ぼすこととなった。村井章介氏は「倭」という言葉自体を検討し、「倭」が必ずしも日本を意味するのではなく、自身がかつて提起した「環東シナ海地域」の表象として「倭」を把握した<sup>18)</sup>。国境を超えた地域社会の主体として「倭寇」を把握する視座は通説的地位を確保したと言ってよいであろう。

このような「倭寇」論に疑問を提起したのが浜中昇氏与李領氏である。浜中氏は「李順蒙上言」を再検討し、その信憑性に疑問を呈した。また当時の高麗社会を検討し、倭寇を形成する領主制が高麗には存在しないことを論じて田中・高橋・村井説を批判した。そして課題としては倭寇がなぜ十四世紀末に生じたのかは判然としないことを挙げたのである<sup>19)</sup>。浜中氏と同様に高麗社会

の検討を通じて田中・高橋・村井説に疑問を投げかけた李氏は、浜中氏が課題として挙げた倭寇生起の原因について、倭寇始まりの年と意識されている庚寅年(一三五〇年)における九州情勢を分析し、足利直冬下向に伴う少弐頼尚の兵糧調達行動が「庚寅年以降の倭寇」の原因だという仮説を立てた<sup>20)</sup>。

高麗・朝鮮において「倭寇之侵始之」と意識された庚寅年(一三五〇年)二月の「倭寇」が少弐頼尚の兵糧調達行為であることは、十分説得性のあることであると思われる。しかし実際問題としてそれで全ての「前期倭寇」が説明できるのかといえれば疑問が残る。この点は李氏も「庚寅年以降の倭寇」が大規模で、しかも連年発生していた背景には、九州全域と瀬戸内海等の広い地域の悪党が、南朝方の水軍として動員されていたという、特殊時代的な背景があった<sup>21)</sup>「足利義満による南北朝統一後のころの倭寇と、南北朝期の倭寇が類似すると考えるのは危険<sup>22)</sup>」として、あくまでも高麗末期の「庚寅年以降の倭寇」に絞っていることを明言してはいる。しかしここでさらに若干疑問が生じないでもない。一つは、庚寅年の倭寇の本体を少弐頼尚とし、征西府には倭寇を行なう必然性がない<sup>23)</sup>と一旦はしておきながら、一方で南朝方の水軍の関与にも求める<sup>24)</sup>のは、矛盾はしてないまでも説明不足であろう、という点である。そしてもう一つは、高麗末期と朝鮮初期の「倭寇」を全く別物とする見解はどうであろうか、という点である。確かに回数は大きく減少し、規模も小さくなって行くのは事実であるが、室町幕府に対する反体制勢力によるという高麗末期の倭寇は日本の南北朝合一とともになくなったのであろうか。

「倭寇」における高麗・朝鮮の人々の関与という視点は、さらに新しい課題を背負うこととなった。扶桑社の『新しい歴史教科書』検定通過に端を発する教科書問題の中で、日本で発行されている全ての教科書について「倭寇」への高麗・朝鮮人の関与という記述は日本の犯罪行為を隠蔽する記述だという議論が登場してきた<sup>25)</sup>のである。この点に関しては東京学芸大学とソウル市立大学の共同開催による韓日歴史教科書共同シンポジウムにおいても「倭寇」に関する認識の韓国・日本の対立は埋まらなかった。日本側の「十四世紀～十五世

紀の濟州島をはじめとする朝鮮半島南辺の海民の中には『倭賊』と日常的交流があり」という記述に対し、韓国側の記述は「倭寇とは韓半島と中国沿岸を中心として活動していた日本人海賊の呼称である」となっている。韓国側の研究者は日本の記述に対する史料的根拠としての『朝鮮王朝実録』の記述に対しては「朝鮮王朝実録にそう記された理由を厳密に解釈する必要がある。もう少し検討が必要だ」として濟州島をはじめとする朝鮮半島南部の海民の活動については信憑性を認めていない<sup>26)</sup>。

「倭寇」をめぐる議論にはこのようにさまざまな見解が出されており、まずは「倭寇」という語の歴史的事態を確定する必要があるだろう。すでに悪党研究では「悪党」という語の実態を究明しようという試みが山陰加春夫氏<sup>27)</sup>や海津一朗氏<sup>28)</sup>によって展開されている。ここで悪党研究を持ち出す理由としては、李頌氏が悪党と倭寇の共通性を取り上げ、論じている<sup>29)</sup>からである。もし李氏の言うとおり、倭寇が悪党と共通点が多いのであれば、悪党とはそもそも何か、という議論が必要だろう。まず山陰氏は、「悪党」という言葉で表現される集団が実に多様であるという事実からはじめている。そして山陰氏は「悪党」という語は訴訟に関わる歴史的用語であるという視点を提唱した。一方海津氏は蒙古襲来後の社会の変化とそれに対応するための「行政改革」＝「徳政」の研究を通じ、「改革」の中で不利益を被る人々の存在を抉り出した。そしてこのような「徳政」の中で落ちこぼれていった人々を追いかけた海津氏は「悪党」を国家への敵対者に対する統制用語であると規定した（蛇足だが近年流行の言葉を使えば「抵抗勢力」という言葉がぴったりだろう）。山陰氏や海津氏の議論は、「悪党」を実体としてではなく、表象と捉える点が特徴といえるだろう。このような視点によって史料中に現われるさまざまな悪党象を整合的に検証することができるようになったのである。

「倭寇」研究においても同様にさまざまな「倭寇」象を整合的に検証するための視座作りを行なう必要があるだろう。現に田中氏は「倭寇」という語に対して「諸文献に倭寇またはそれと類似した文字で記されたもの」<sup>30)</sup>と規定し、

その曖昧さと後世の人々の先入観による倭寇像の構築について述べている。それに対し李氏はこの田中氏の議論を批判し、『高麗史』の検討を通じて『高麗史』は「倭寇」を「明確に『日本人で構成された海賊団』を指していると確定できよう」<sup>31)</sup>と結論づけた。しかし田中氏とのずれの原因は、李氏の場合はあくまで『高麗史』における用例を検討したのに対し、田中氏は「倭寇」全体を考察の対象にしていることにあるだろう。従って田中氏の提示する「倭寇」像が非常に多様性を帯びてくるのに対し、李氏の提示する倭寇は単一のものである。これでは議論はそもそも噛み合わないだろう。しかし田中氏も「大規模倭寇集団」という言葉で主として高麗末期の倭寇の問題も考察している。ここでの対立点は『高麗史』の信憑性だろう。李氏は『高麗史』を「客観的」「正確」な史料とみなしているのに対し、田中氏は朝鮮側のヴェールがかかっているとしている点である。最後に私見として李氏の議論に疑問をさしはさむとすれば、「倭寇」を構成する「日本人」とはどのような実体を指しているのか不明確であるということであろう。「日本」「日本人」という言葉を今日の「日本人」と同一視する視点がないとはいえないだろうか。しかし当時の「日本」「日本人」と表現される言葉は今日「日本」「日本人」という言葉で表現されるものとは同一ではない。また「倭」と「日本」は同じ範囲を指すのだろうか。その点も疑問を感じざるをえない。網野氏は「『日本人』の語は日本国の国制の下に置かれた人々という意味で使い続けたいと思う。」として「『倭人』はけっして『日本人』と同じではない」と述べた<sup>32)</sup>。

網野氏の問題提起を受け、本稿ではまず「倭寇」という語の用例を検証し、「倭寇」という語がそもそも何を意味しているのかを考察したい。次に「倭寇」が「日本人の海賊行為」という議論の前提になっている、「倭」という言葉が何を指しているのか、日本という語とどのように使い分けられているのかを検討したい。最後に「倭寇」における日本列島上の勢力の関わり方を見て行きたい。従来貧窮化した「三島」の海民の海賊行為という説明がなされてきたのであるが、この説明ではなぜ十四世紀後半から十五世紀の前半という時期に「倭



寇」が生起するのかが説明できないと考えるからである。もし貧窮化した海民というのであれば、別にこの時期には限らない。これについては李領氏が「庚寅年の倭寇」の原因を少弐頼尚の兵糧調達行為に求めたが、本稿ではそれ以後の少弐氏の動向にも求めたい。室町幕府は明らかに「倭寇」の担い手を少弐氏被官に求め、朝鮮王朝も少弐氏の動向と倭寇の関係にはかなり神経質になっているのである。

### 3 「倭寇」の用例

「倭寇」という言葉には次の二つの用例がある。一つは「倭寇（地名）」という用例（以下倭寇(1)）で、「倭が を寇す」と訓む。もうひとつは成語としての「倭寇」（以下倭寇(2)）である。「倭寇(1)」の初出は『高麗史』高宗十（一二三）年五月甲子条の「倭寇金州」であり、「倭寇(2)」の初出は『高麗史』忠烈王四（一二七八）年六月戊戌条の「合浦鎮成軍以備倭寇」「倭寇不足畏也」という忠烈王と世祖の会話である。

『高麗史』においては圧倒的多数が(1)の用例であり、(2)はかなり少数である。しかも(2)の用例は『高麗史』忠定王二年二月条の「倭寇之侵始之」という、いわゆる「庚寅年の倭寇」と後世いわれることになる記事の周辺に見られるだけである。『高麗史』におけるこのような傾向は『朝鮮王朝実録』になるとかなり変わってくる。試みに『朝鮮王朝太祖実録』をひもとくと、二十一例が倭寇(1)であり、二十四例が倭寇(2)ということになる。「倭寇」という言葉の朝鮮資料による検討から見ると、「倭寇(2)」は庚寅年の倭寇を表現するために『高麗史』編纂の過程で見出された可能性がある。というのは初出の忠烈王と世祖の会話文を除き、「倭寇(2)」の用例は専ら地の文で使われているからである。忠烈王と世祖の会話にしても必ずしも「倭寇(2)」が使われたとは限らない。編纂過程で「倭寇(2)」の概念を使用した可能性は残されている。こうして見ると、「倭寇(2)」は朝鮮王朝において積極的に使われた用語である可能性が高い。

次に明の史料における用例を見ておこう。結論から言うと、明には「倭寇<sup>(1)</sup>」という用例は存在しない。<sup>(1)</sup>の意味で使いたいときには「倭夷寇」と付け、「倭寇」という形にはならない。『明世宗実録』という明代後半、特に「嘉靖の大倭寇」の時期においては<sup>(1)</sup>の意味で使う時には「倭寇攻」というように「倭」と「寇」を一つの語として扱っているのがわかるだろう。あるいはこの時期になると「倭寇」というように出身地名を明記する「倭寇」も現われる。これなどは「倭」と呼称していながら、その実中国大陸沿岸の人々の関与が存在することを『明実録』の編纂者が表白していることを示している。「倭寇<sup>(2)</sup>」はどうやら明において中心に使われ、一方「倭寇<sup>(1)</sup>」は高麗で使われていた語であるらしいということが見えてきたのではないだろうか。問題はなぜそのような使い分けがなされていったのか、ということである。ここでははっきりとしたことはわからないが、私見では次のように考えたい。「倭」という一言で人間集団を表す場合は「倭」自体にはマイナスイメージは付着していないのである。それは『高麗史』がしばしば「倭人」という中立イメージの言葉を使うことから明らかである。「倭寇」の場合、中立イメージの「倭」が「寇」という悪事を働いているということで、「倭」そのものに敵のイメージは付随してこない。ところが「倭寇」という言葉で人間集団を表示すると、その集団そのものに大きなマイナスイメージが刻印されることになる。すなわち<sup>(2)</sup>用例は海禁体制が構築されていく中で、公権力の認定を受けない交易集団を抑圧するためのレッテルとして見出され、作り上げられていったのではないか、ということである。

#### 4 「倭」と「日本」

そもそも「倭」という言葉と「日本」という言葉の間にはどんな差異があったのだろうか。網野善彦氏が「倭」と「日本」とは異なるという、いかにも「日本」という国号にこだわる氏らしい議論を展開している<sup>33)</sup>が、具体的にど

のような違いがあったのだろうか。また村井章介氏は「倭人」と「日本人」との違いについて、「倭寇は日本人か朝鮮人が、という問い自体、あまり意味がない。倭寇の本質は、国籍や民族を超えたレベルでの人間集団であるところからこそあるのだから」<sup>34)</sup>と論じているが、その見解に対し浜中昇氏は「『倭』と『日本』はニュアンスの差はあっても実体は同一」「『倭』とは別個に、中世の日本というものが存在したわけではない」と村井説を批判した<sup>35)</sup>。また李領氏も「日本」と「倭」の使い分けを検討し、「日本」= 公式的名称、「倭」= ネガティブな意味を持つ非公式的名称という厳密な区分によって使い分けられている<sup>36)</sup>と結論づけた。その上で李氏は「倭寇」を「明確に日本人で構成された海賊団」と確定した。李氏もまた「倭」と「日本」は同一の実体を、二つの呼称の使い分けで区分していると考えているのであろう。

しかし『高麗史』においては「倭」と「日本」を別個のものとして扱っている事例がある。斎藤満氏は「高麗は『日本国』と『倭国』を区別して記録していることを検出し、『高麗史』に一度だけ出てくる「倭国」を「征西府であると推定」した<sup>37)</sup>。斎藤氏が喝破したように、当時日本には二つの権力が両立していたわけであり、「日本」が単一ではなかったというのは、むしろ当然すぎるのである。斎藤氏のこの卓見はしかし残念ながらその後展開されることもなく、現在に至っているが、本稿では斎藤氏の驥尾に付して「倭」と「日本」の使い分けについて検討していきたい。

まず『高麗史』であるが、斎藤氏の見解に従えば「倭」は南朝方である。とすると『高麗史』における「日本」とは北朝となるはずである。実際『高麗史』にあらわれる「日本」は圧倒的に多いのが室町幕府の九州探題今川了俊で、それに次ぐのが防長の守護大内義弘、他のものも例えば天龍寺住持や相国寺二世を歴任した禅僧春屋妙葩など室町幕府関係ばかりである。一方の「倭」は私的な関係に使われ、その多くはマイナスイメージをもって記されている。もっとも全くマイナスイメージを持たない「倭」も少数ながら存在するが、少なくとも室町幕府関係者を「倭」と呼称する例はない。したがって『高麗史』にとつ

での「日本」とは室町幕府であり、敵対勢力に「倭」「倭国」という呼称をつけたのであろう。『高麗史』のこの記述による限り、「日本」と「倭」とは明らかに区別して使用されており、別個のものとして扱われていたことがわかるだろう。しかも「日本」という呼称も今日の我々の想起する「日本」とは異なり、あくまでも室町幕府という特定の勢力の呼称として使用されていると考えることができよう。

『朝鮮王朝実録』では当然南朝はすでになく、「日本」=室町幕府として扱われているのは当然である。従って「倭」という呼称で何を指しているのかは、『高麗史』ほどはっきりしているわけではない。「倭人」「倭客」という言葉で使者を表現している例も存在するし、「倭通事」という言葉もある。『朝鮮王朝実録』を見る限りにおいては、確かに「日本」は国家を意識した用例であって、「日本」と「倭」は実体においては同一といえるのかもしれない。しかし『朝鮮王朝実録』において見られない用例が存在する。それは「倭人」「倭通事」「倭客」に対する「日本人」「日本通事」「日本客」という言葉である。これは「日本」がかなり限定された用例でしか使われていないことを示しているだろう。「日本」を使うのは基本的に室町幕府を意識したときに使うのである。守護大名(世宗期には 太守、後に巨酋と表記される勢力)はしばしば「日本」を冠せられる。しかしそうでないと認識されれば、例えば「倭人三未三甫羅」と表記されるのである。これは朝鮮側の主観によって処理されるので、たとえ守護大名であっても朝鮮側がそのように認識していなければ容赦なく「倭人藤原頼久」<sup>38)</sup>(島津頼久)と「倭人」扱いになってしまうのである。

『高麗史』と『朝鮮王朝実録』においては「倭」と「日本」とは明らかに意識して区別している。それは単なる「国家を意識」しているかしていないか、というレベルではない(その「国家」という認識が曖昧であるという点は今はさておく)。『高麗史』や『朝鮮王朝実録』における「日本」とは室町幕府のことなのである。そして当時の日本列島上には「日本」以外の勢力が多く割拠しており、朝鮮側も宋希璟<sup>39)</sup>や朴瑞生<sup>40)</sup>の詳細な報告によって「御所」=室町殿

の勢力は都周辺のみであり、御所との通交は交隣の道ではあるが、禁賊のためには役に立たないので、御所との通交は必要最小限にして、九州北部の海上勢力を手なずけた方がよい、と報告しているのである。

一方、このような傾向性は『明実録』では見られない。『明太祖実録』ではそもそも当初「日本」と認定したのは北朝でもなければ、南朝でもなく、南朝の出先機関にすぎない征西將軍宮懷良親王だったのである。洪武帝は当初即位の詔を「日本」に遣わしたが、当時大宰府と博多を制圧していた懷良親王を日本国王に冊封したのである。しかし洪武帝の派遣した冊封使が博多に到着した時にはすでに懷良は没落しており、冊封使は室町幕府の九州探題今川了俊に囚われの身となる。彼らは京都に護送され、細川頼之との交渉の末に室町幕府は明に「日本征夷將軍源義満」名義の使者を派遣するのであるが、洪武帝は懷良を「朕以為日本正君」という理由で足利義満の使者を追い返し、正式の「日本」とは認定せず、あくまでも南朝方の一勢力に過ぎなかった征西將軍府（事実上の九州幕府 - 懷良は日本国王になる前年には征夷大將軍と自称する）を「日本」と認定するのである。しかもこの認識は懷良が明らかに「日本王」の「近属」でしかないということが判明した後も、懷良を「日本」の国王として扱う姿勢を変えていない。後に懷良名義の偽者が出現し、しかも懷良には全く統治能力がないことが明らかになり、洪武帝は胡惟庸事件を契機に「日本国王良懷」との断交に踏み切るが、この時にも室町幕府と交渉を持つという選択肢を選ばなかったのみならず、「征夷將軍源義満」とも断交を宣言するのである。その後も明には「日本国王良懷」名義の使者が派遣されるが、貢は却けられている。にもかかわらず『明実録』における「良懷」に対する「日本国王」表記は変わらない。明はあくまでも「日本」の支配者として「良懷」を想定していたのである<sup>41)</sup>。

一方「倭」表記はどうだろう。結論から言うと、先ほども述べたように『明実録』においては「倭」という言葉はあまり使われていない。「倭夷」という言葉を使う。また「倭」という言葉はあまり法則性はない。室町末期になると

足利氏でさえ「倭王」と表記される始末である。従って『高麗史』や『朝鮮王朝実録』のような「倭」と「日本」との使い分けはないとみてよいだろう。ただ注目したいのは、高麗とは異なって明は南朝方の出先機関を「日本」と認定したことである。明らかに明も「日本」を単なる統治機関を指す言葉として用いていることが分かる。その点やはり「倭」とは全く意味が違うのである。『明実録』にも「倭人」という用語はあっても「日本人」という用語は見られないのも「日本」という用語の使い方と関係があるだろう。

浜中氏は「『日本人』は国家としての『日本』を意識した用語法であり、その実体は倭人」であるとして「倭」と「日本」の違いを論じる議論を批判した<sup>42)</sup>。しかし「日本」という国家は一つではない。少なくとも南北朝時代には複数存在したのである。どの勢力を「日本」と認定するか、によって「日本人」の実体は変動するのである。そして「日本」と認定されなかったものが「倭人」となる以上は、「日本人」の実体は「倭人」などとはいえないだろう。そもそも「日本人」という用例自体、ほとんど見られない<sup>43)</sup>のである。これは「日本」の用例を考えれば、むしろ当然だろう。

高麗は室町幕府を「日本」と認定し、敵対勢力を「倭」「倭国」とした。明は反対に南朝方の九州幕府を「日本」と認定したが、同時に「日本国持明与良懐争立」という認識から、「良懐」を「正君」と認定するも、「持明」すなわち室町幕府も一応「日本」と認定した。ただ「持明」の内幕が「幼君在位」という状況の中「執事壇権」という権力の下降分散現象が見られることが洪武帝の受け入れるところとならず、また明使に対する強硬な細川頼之の姿勢が洪武帝の印象を悪化させた結果、「正君」認定から外れたのである<sup>44)</sup>。また明にとっては良懐の崩壊が明の危機にもつながることは考えられないので、良懐と敵対する室町幕府を「倭」と認定するのはためらわれたのではないだろうか。

以上の考察から、「日本」という用語は高麗や明や朝鮮が公的な交渉相手と認定したのに対して使われるものであることが明らかになったと考える。つまり「日本」とは明中心の海禁・華夷秩序システムの構成員として認定された

勢力の呼称として使われる用語なのである。対して「倭」という用語は海禁・華夷秩序システムから排除された勢力を表象するための語である。私的な交易者も「倭」と表記されるのは、彼らが海禁・華夷秩序システムでは違法だからであろうし、しばしばネガティブなイメージを付与されて使用されることになるのも当然だろう。やがて「倭」には「敵」のイメージが付与され、海禁体制から外れた集団に付与されるレッテルとなるのである。いわゆる後期倭寇などはその最たるものであろう。

## 5 ある「倭寇」の実体 - 永享十二年の少弐嘉頼赦免をめぐる -

永享十二（一四四〇）年、大内持世に対して細川持之奉書<sup>45)</sup>が発給された。それは持世の仇敵である少弐嘉頼を赦免する、というものであった。しかもそれは大内持世側から出された要請であった。その背景については『建内記』に次のように記されている。「筑紫御敵 少弐・菊地歟 御免事及御沙汰、大内可和睦彼等之由被仰出之。是敵陣依御退治難堪忍之間、高麗盗人連続衰微難治之由、今度渡朝高麗人等嘆申、仍及是御沙汰、今日被下上使奉行飯尾加賀守為行・同大和守貞連兩人也、進発畢」<sup>46)</sup>つまり少弐氏赦免の理由は、大内氏との戦闘の中で追いつめられた少弐氏が「高麗盗人」つまり倭寇化してしまっており、その対策を室町幕府に求めてきたからだというのである。

この問題に対して、佐伯弘次氏は、大内持世に対して出されていた上洛命令を実行するためには背後の少弐氏との和睦が不可欠であった、として大内氏側の事情を考察し、同時に朝鮮使節からの倭寇再発防止策と日本からの通交者抑制策の実行要請が存在したために、結局足利義教は少弐氏赦免を行なわざるをえなかった、と結論づけた<sup>47)</sup>。佐伯氏の研究に導かれつつ屋上屋を重ねることを承知で、この時期の少弐氏の立場と倭寇問題との関係について考察したい。

まずこの問題を考察する前に、「海賊」という用語について見てみたい。当時の室町幕府の政治顧問であった満濟は次のように書いている。「以飯尾大和守被

仰、唐船来朝時警固事、四国海賊共並備後海賊等、各罷向小豆島辺、壹岐対馬者共不致狼藉様能々令警固、可令着岸由、管領並山名兩人方へ可仰遣云々」<sup>48)</sup>ここで満濟は「海賊」という用語を現代語のそれとは明らかに違う用例で使用していることがわかる。満濟の「海賊」は「警固」を行なう集団であって、幕府に対する抵抗勢力ではない。逆に「狼藉」を行なうのは「壹岐対馬者共」であると考えていた。これが朝鮮側の史料に見られる「倭寇」であろうことは想像に難くないが、それでは「壹岐対馬者共」はどのような勢力と認識されていたのであろうか。これについても『満濟准后日記』に興味深い記述がある。「唐人官人等訴訟申入事、三カ条在之。一、賊船事、自今以後堅御停止、第一唐朝大慶也。為賊船用心、不断置警固之条、唐朝煩万民嘆此事云々。一、賊船二被取唐人共、都鄙二散在歟。被召集悉歟可被帰唐之条、可畏入云々。一、(中略)賊船事八壹岐対馬者共、専致其沙汰歟。此両島大略少弐被官歟。然者可被仰付少弐事也。但少弐事、既去年以来、被成治罰御教書、被差向御勢事也。(中略)所詮対馬一国八少弐内者宗家者共知行仕歟。(中略)壹岐事何者知行哉。不明明候。若下松浦者共過半知行候歟。然者是も少弐方者候歟」<sup>49)</sup>

この史料は明から足利義教を冊封するためにやってきた明使からの申し入れを記録したものである。「賊船」すなわち倭寇行為への対策を室町幕府に求めていることがわかる。それについての室町幕府の回答は、「賊船事」は「壹岐対馬者共」の行為であり、しかもそれについて「対馬一国八少弐内者宗家者共知行」と認識しており、壹岐についても松浦党即ち少弐方の行為と考えていたのである。しかも少弐氏については「既去年以来、被成治罰御教書」と室町幕府の治罰の対象となっていたのである。つまりこの段階では少弐氏は室町幕府への敵対者となっていたのである。少弐氏と幕府の対立関係は古く、南北朝時代に今川了俊が少弐冬資を暗殺し、少弐頼澄が征西將軍側に立って抵抗を開始して以来、すでに六十五年近くにわたっていた。しかも一旦は朝鮮と大内氏のとりにしにより帰参を許されたはずの少弐氏はその二年後にははやくも再び治罰の対象となってしまう<sup>50)</sup>。従って十五世紀の前半までは少弐氏は室町幕府の



敵対勢力となっていたのである。少弐氏が室町幕府に帰参がかなうのは、宿敵大内政弘が応仁の乱において西軍について幕府に反旗を翻したときである。

室町幕府と敵対する少弐氏を朝鮮側はどのように見ていただろうか。それについて少弐氏被官の宗氏と朝鮮の関係を見ておきたい。しばしば対馬の宗氏は日朝の仲立ちをした勢力と見られがちである。しかし十五世紀前半においてはその印象は正確ではない。朝鮮側の対馬観を示す次のような史料がある。「熊瓦（宗貞盛）不顧国家大恩回礼使宋希璟之還也馮小二殿（少弐満貞）倨慢無礼。弟熊寿亦不親接待」<sup>51</sup>。これは対馬を朝鮮が攻撃した応永の外寇（己亥東征）の後の回礼使宋希璟（『老松堂日本行録』の筆者）の報告である。そこでは対馬守護代宗貞盛と少弐満貞が朝鮮に対して「不顧国家大恩」「倨慢無礼」であることが述べられている。つまり少弐氏も宗氏も敵視されているのである。朝鮮側の少弐・宗氏への敵視が朝鮮上王太宗による対馬併合構想とその発動たる己亥東征を惹起したともいえるのである。この段階では日朝関係を仲介する立場に対馬はないといえよう。むしろ朝鮮と関係が深かったのは大内氏である。大内氏はその祖先として百済王をあげている。百済王の流れを引くという祖先伝承は朝鮮側にも好感を持たれたようで『海東諸国紀』においても「大内兵強九州以下無敢違其令。以係出百済最親於我」と記されているし、また『朝鮮王朝実録』においても、例えば嘉吉の乱の記録には赤松満祐は「阿可馬豆」と記され、管領については「山知温」（おそらく義教の舅三条実雅と混同しているであろう）と表記するという混乱を示しているのに対して大内氏に関しては「大内殿」と表記し、また実際に嘉吉の乱に巻き込まれた大内持世の死に関しては実に精緻に記録している<sup>52</sup>）のである。この記述の精粗の差異に朝鮮側の関心が表されているといえよう。そして少弐・宗氏に対して敵視、大内氏に対して親近感という朝鮮側の認識<sup>53</sup>は、当時の少弐・宗氏と大内氏と室町幕府の相互関係を見るとむしろ自然だろう。

少弐・宗氏が大内氏に代って日朝関係において大きな役割を果たすようになるのは皮肉なことに少弐氏の没落が原因であった。というのは一四三三年、少

式満貞と少式資嗣が大内持世に討ち取られ、満貞次男の嘉頼と三男の教頼が対馬に逃亡し、宗氏を頼ったのである。この間の事情を『朝鮮王朝実録』は次のように記す。「初日本国有大内殿小二殿。各抛土地、父子相継、常常戦闘(中略)今小二殿勢窮力竭、奔于対馬、既失根本之地、至於困窮安能大発兵為寇乎。因其絶食、無以為生、寇掠海辺則有之。是可慮也」<sup>54)</sup>「今来倭頼沙文言、小二殿兵敗失土。将卒五千余人来対馬島留居。若乏粮飢饉。則或有入寇之理」<sup>55)</sup>ここでいわれているのは、少式氏の没落が即倭寇の発生につながっているという事情である。少式氏が困窮すると倭寇行為にその活路を見出すのは、李領氏が検討した少式頼尚による「庚寅年之倭寇」以来の伝統であり、朝鮮側としても対馬を追い込むわけにはいかないという事情があったのだろう。そして朝鮮側は没落した少式氏を支える宗氏に少式氏の倭寇化と対馬島人の通交者の増大の抑制の役割を期待することにしたのであろう。大内氏に頼る限り、大内氏の少式氏攻撃は続き、それによって少式氏が倭寇化するという悪循環しか招かないことを朝鮮は悟ったのである。ここに朝鮮の政策変更が行なわれることとなった。すでに文引制度によって宗貞盛の対朝鮮関係は他に比べて優位に立っていたが、それはあくまでも対馬対朝鮮の関係においてのみであり、そもそも対馬内の勢力に対してすら貫徹してはいなかった。文引なしでも結構朝鮮側は使者を受け付けていたのである。しかし一四四三年に朝鮮は宗貞盛と癸亥約条を締結し、対馬の対朝鮮交渉有資格者を事実上貞盛に固定することにした。癸亥約条を結ぶときに朝鮮側は貞盛に島主権強化というメリットを提示したという<sup>56)</sup>。朝鮮側は癸亥約条を貞盛相手に締結することによって、貞盛を公的な日朝関係の統制者として指定したのである。関德基氏は癸亥約条について「対馬は倭寇の朝鮮侵寇を禁圧する反対給付として朝鮮から交易上の諸利益を大きく確保することができた」と論じ、この時期の朝鮮 - 対馬関係を「羈縻政策」と評価した<sup>57)</sup>。

このような関係に慌てたのが大内教弘である。教弘は朝鮮に今日の常識から見れば驚天動地ともいふべき申し入れを朝鮮に行なっている。「曩聞大内殿有

言、対馬島本朝鮮之地、我興兵往伐。朝鮮挾撃之、以為牧馬之島可矣今又有対馬島、欲与大内殿相戦、整齐軍兵之語、若大内殿不勝則已。勝則彼島倭、必為窮寇」<sup>58)</sup>これはつまり教弘による対馬割譲計画である。教弘は対馬を朝鮮の土地であるから征伐して朝鮮に返還するので朝鮮側も行動を起こしてほしい、と申し入れたのである。しかし朝鮮側はその申し出には乗らなかった。もし大内氏が勝利した場合、敗北した「彼島倭」つまり少弐教頼が倭寇化することを恐れていたのである。

この朝鮮の心配は決して杞憂ではなかった。現に追いつめられた少弐氏が倭寇化する事例は存在したのである。万里小路時房は『建内記』において次のような事例を記録している。「高麗国朝貢使来朝、先日参室町殿奉拝云々。伝聞赤松左馬助 故満祐法師弟也、謀反人也 去々年没落播州不知行方之处、菊地被相憑、越于高麗国、打取一力国及難儀之由、今度高麗人嘆申云々。仍可被退治之由、有沙汰云々」<sup>59)</sup>

この文中の「高麗国朝貢使」とは卞孝文のこと、帰途に対馬と癸亥約条を締結する人物である。倭寇問題の解決が彼の大きな使命であったことがうかがえる。その卞孝文の申し入れの中で目を引くのが、赤松満祐弟則繁の「越于高麗国、打取一力国」=倭寇化である。則繁を支援したのは『建内記』においては「菊地」となっているが、これは時房の「敵」=「南方残党」という固定観念のなせるわざであり、実際は少弐教頼であった。

以上見てきたように、少弐氏は室町幕府の治罰を受け、大内氏と抗争を繰り返す中で没落して行くが、その過程の中でしばしば倭寇化<sup>60)</sup>した。十五世紀前半までの倭寇はその一部が少弐氏によって担われていた、少なくともそのように認識されていたこと<sup>61)</sup>が明らかになったであろう。朝鮮側の倭寇対策は宗氏の統制力を強め、倭寇を禁圧させることによって遂行されて行く。その過程の中で宗氏は少弐氏からの自立を進め、十五世紀後半、宗氏と対立した少弐氏は大内氏に敗北して肥前東部の山間部に追いやられ、やがて滅亡する。

朝鮮や明から「倭寇」と呼ばれ、禁圧の対象になった少弐氏を室町幕府はど

のように呼称していたのだろうか。興味深い史料が存在する。満済は畠山満家と山名時熙から足利持氏の使者の扱いをめぐる諮問を受けるが、その時に満済が現状分析として述べた答申の一部である。「天下惣別事九州等モ号土揆(一脱力)大内己渡海。大友・菊池・少弐等内々八土一揆同心風聞候歟。事六借様候。(中略)関東事御中違治定候者、国々諸人ノ振舞モ自然寄土一揆左右無正体振舞モ出来候テ八傍可為難儀時節候」<sup>62)</sup>ここで目に付くのは「土一揆」という言葉である。当時治罰御教書を受けていた大友・菊池・少弐の三氏は「土一揆同心」であり、また世の中の乱れも「国々諸人ノ振舞モ自然寄土一揆」というところに原因があるというのである。しかしそれにしても九州の有力守護大名までもが「土一揆」同心とは奇異な感じも受けるが、この「土一揆」を民衆闘争の「土一揆」と考えるから奇妙に感じるのである。この「土一揆」とは幕府に対する反逆者に付せられたレッテルなのである。この「土一揆」の朝鮮・明における用法が「倭寇」だったと考えられないであろうか。つまり「倭寇」もレッテルだったのではないだろうか。少弐氏の倭寇化は「倭寇」のほんの一面でしかない。室町幕府と朝鮮王朝、そして明王朝が作り出す朝貢システムからはみ出た集団に対するレッテルが「土一揆」であり「倭寇」だったのである。

ここでは「日本」から脱落して「倭寇」化した勢力として少弐氏にスポットを当ててみたが、同様に朝鮮から脱落して「倭寇」化する勢力は存在しえないのであろうか。浜中氏は「海民を海賊集団として組織しようような主体は、朝鮮国内には見出しがたい」「朝鮮半島南部の海民が高麗末期の倭寇に参加したとしても、それは個別的な次元に止まったとみるべきであろう」<sup>63)</sup>と述べているが、その論拠を「中世の朝鮮には日本の領主制に相当するものが存在しない」という点に求めている。しかしそもそも「領主制」が存在しないことを以て「倭寇」に合流する勢力の否定に結びつけるのには少し飛躍があるのではないだろうか。仮に浜中氏のように「日本」を「領主制」で分析することが妥当だとして(この前提に既に大きな問題があるのだが) そもそも少弐氏も「領主

制」を貫徹していたのではない。少弐氏は行政官僚的性格と貿易の利への過重な依存によって没落した勢力である<sup>64</sup>。それゆえに「日本」から脱落し、「倭寇」化したのである。そのような少弐氏は「日本人」なのだろうか。今日の我々の認識で言えば「日本人」だろう。なぜなら少弐氏は「日本列島」上で生まれ、「日本列島」で活動していたからである。そして基本的には「日本国家」から官職を受けている以上は「日本人」であると言うのかもしれない。しかし今日の「日本人」という観念が十五世紀という時代にもそのまま通用すると考えるほうが無理である。ここまで見てきたように「日本」とは室町幕府そのものでしかないのであって、室町幕府から治罰御教書を受け、「土一揆同心」と名指しされている少弐氏は「日本」から脱落していたのである。このような人々は「倭」として処理されていたのであるが、その担い手をすべて今日的な意味での「日本人」=日本国籍取得者に限るのは、あまりにも現代の認識に拘束され過ぎているのではないだろうか<sup>65</sup>。

中世の日本は「一つの日本」ではない。「日本」と意識されていた北東の津軽から南の鬼界ヶ島（実際には北端は佐渡、東が津軽、西が五島列島、南が鬼界ヶ島である）にいたる領域の中で「国王」と認知され、自らも「公方」と称していた室町殿は自己の支配する領域を次のように把握していた。「遠国事ヲ八少々事雖不如上意候、ヨキ程ニテ被閣之事八非当御代計候。等持寺殿以来代々此御計ニテ候ケル由伝承様候」<sup>66</sup>「南部方へ下国和睦事、以御内書可被仰出事、若不承引者、御内書等不可有其曲歟事、遠国事自昔何様御成敗毎度事間、不限当御代事歟。仍御内書可被成遣条、更不可有苦云々。以上畠山意見〔二ヶ条也〕。山名申事、南部方へ御内書事八畠山同前也」<sup>67</sup>ここから見える室町殿周辺の意識について本郷和人氏は「東北、関東、九州地方は「鄙」であり、政治的遠国、辺境なのであって、幕府が実際に掌握すべき地域は「畿内近国」「瀬戸内」「中部」の三ブロック」<sup>68</sup>であると論じた。このような統治理念が「倭寇」への取り組みを消極的にし、結果「遠国」たる「鎮西」の一部=少弐氏の支配地域たる沓岐・対馬が倭寇システムに組み込まれていった、とはいえ

るだろう。しかしそれは日本が「巧みに取り込んだ」といえるのだろうか。まして「日本が近代化した理由」になりうるのだろうか。あるいは彼らは「日本人」だったのだろうか。史料に「日本」という言葉があるからといってそれを今日の「日本」と重ねあわせる事がきわめて危険である事も言うまでもないだろう。

## むすびに

本稿では「倭寇」を材料にしつつ、近年隆盛を見せている「海洋史観」について論評してきた。まず「倭寇」という言葉について検討し、「倭寇」という呼称そのものが明代、朝鮮王朝代に多用される史料用語であり、ある実体を把握したものであるよりはむしろレッテルであることを主張した。その上で「倭」と「日本」「日本人」という言葉について考察を加え、「日本」とは室町幕府乃至は征西將軍府を指す言葉であり、その内容は高麗・朝鮮・明それぞれずれがあることを検討した。最後に朝鮮から「倭寇」の一部と認識され、日朝関係においてしばしば問題になった少弐氏に関して考察を行ない、明代の朝貢システムからの脱落に「倭寇」たる条件を求めたのである。

「海」からの歴史の見直しは、非常に意義のある事である。その時に見直しの対象となるものに「日本」という概念も含まれるだろう。「倭寇」は「海洋史観」においては「日本」の海洋指向の現われとして評価されている。しかしこれらの議論に欠落しているのはそもそも「日本」「日本人」とは何か、という議論である。村井章介氏は「明治以前の沖縄史や北海道史はどこまで「日本史」なのか、という問いは、「中央」の歴史過程の詳細を解明する事に忙しい「本土」「内地」(特に首都圏や近畿圏)の歴史学界において、つねにしっかり念頭に置かれていたとはいえない<sup>69)</sup>と批評したが、そのような「日本史」に対する批判的言説であるはずの「海洋史観」が「日本」という枠組みを無前提に使用してしまうのではないかという危惧を抱くのである。

付記 本論文の原型は二〇〇〇年十月四日の「辺境」史研究会及び、二〇〇二年四月二〇日の「日本型」社会研究会での報告を元にして書かれたものである。両研究会では出席者の方々に有益な助言を多くいただいた。記して感謝したい。

## 注

- 1) 「シンポジウム 海洋アジアと日本から近代世界を捉えかえす」(『環』6号二〇〇一年所収)一二八頁。
- 2) 『日本論の視座』(小学館、一九九六年)や『日本の歴史00日本とは何か』(講談社、二〇〇〇年)など。
- 3) 白石隆『海の帝国』(中公新書、二〇〇〇年)。
- 4) アンドレ・グンター・フランク著、山下範久訳『リオリエント』(藤原書店、二〇〇〇年、原書は一九九八年)。
- 5) フランク同書、二一七頁。
- 6) 浜下武志『朝貢システムと近代アジア』(東京大学出版会、一九九七年)において朝貢関係を「より包括的・総合的な内容をもつ相互関係」「中国を中心の一つとした中心・周縁間の相互依存の体系」(三頁)と規定している。
- 7) 浜下氏は同書において「非組織ネットワークモデル」の分析を行なっている。そこでは主として香港の位置付けが行われている(第三部)。
- 8) 川勝平太『文明の海洋史観』(中公叢書一九九七年)一八九頁。
- 9) 小林多加士『海のアジア史』(藤原書店、一九九七年)一三二頁。
- 10) 川勝平太編『海から見た歴史』(藤原書店、一九九六年)一七九頁。
- 11) 古くは例えば石原道博『倭寇』(日本歴史叢書、吉川弘文館、一九六四年)や田中健夫『倭寇』(教育社歴史新書、一九八二年)。
- 12) 「二十一世紀の新しい歴史象のために」(『網野善彦対談集 「日本」をめぐる』講談社、二〇〇二年)一二九頁。
- 13) 明末の鄭若曾編の日本研究書。一五六二年編纂。
- 14) 田中『倭寇』。
- 15) 李順蒙上言とは「臣(李順蒙)聞。前朝之季、倭寇興行、民不聊生。然其間倭人不過一二。而本国民佞著倭服、成党作乱。是亦鑑也。」(『李朝世宗実録』二十八(一四四六)年十月壬戌条)というものであり、高麗末期の倭寇にも多く高麗人が参加していたことを示す史料として注目を受けた。ただ李順蒙が自己の主張を正当化するために出してきた議論であるとの見方もあり、この史料を以て直ちに高麗末期の倭寇の構成員を明らかにすることはできない、という議論もある。
- 16) 田中健夫「倭寇と東アジア交通圏」(『日本の社会史1』岩波書店、一九八七年)。
- 17) 高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流」(『名古屋大学文学部研究論集』

史学三十三、一九八七年所収)。

- 18) 村井章介『中世倭人伝』(岩波新書、一九九三年)。
- 19) 浜中昇「高麗末期倭寇集団の民族構成」(『歴史学研究』六八五号、一九九六年)。
- 20) 李嶺『倭寇と日麗関係』(東京大学出版会、一九九九年)。
- 21) 李前掲書一七四頁。
- 22) 李前掲書一九五頁。
- 23) 李前掲書一五七頁。
- 24) 李前掲書一七一頁。
- 25) 高橋公明「海域世界の交流と境界人」(大石直正・高良倉吉・高橋公明共著『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社、二〇〇一年)において、自説について「このような考え方は外国、特に韓国の研究者にはきわめて評判が悪い。日本人の研究者が、倭寇から日本人の要素を、なんとか最小限にしようと必死に努力しているように見えるのであろう」(三六八頁)と述べられている。
- 26) 「朝日新聞」二〇〇一年八月一日付紙面。
- 27) 山陰加春夫「『悪党』に関する基礎的考察」(『日本史研究』一九七七年)。
- 28) 海津一朗『中世の変革と徳政』(吉川弘文館、一九九四年)。
- 29) 李前掲書頁。
- 30) 田中健夫「倭寇と東アジア通交圏」(『日本の社会史』一、岩波書店、一九八七年初出、後『東アジア通交圏と国際認識』一九九四年、吉川弘文館所収)一頁。
- 31) 李前掲書二二四頁。
- 32) 網野『「日本」とは何か』八八頁。
- 33) 網野『「日本」とは何か』八四頁。
- 34) 村井『中世倭人伝』三十九頁。
- 35) 浜中前掲論文六〇頁。
- 36) 李前掲書二二四頁。
- 37) 斎藤満「征西府とその外交についての一考察」(『史泉』七十一号、一九九〇年)六三頁。
- 38) 『朝鮮王朝世宗実録』十六(一四三四)年七月丙戌条。
- 39) 以下は宋希璟の報告「国書、以永樂記年。故御所惡之。不接見於京都也。何不用我応永年号乎。御所者、国人指其王也。国無府庫、只令富人支持。(中略)命令只行於近都地面而已。土地皆瓜分於強宗」。(『朝鮮世宗実録』二(一四二四)年十月癸卯条。)
- 40) 以下は朴瑞生の報告。「修好御所、雖為交隣之道、而於禁賊之策猶緩也。且日本有所求、則遣使請之。如無所求、雖賀新甲旧之大節、漫不致礼。今臣等奉命而至、接待亦不以礼。恐因其国旧史所書而然也。願自今国家不得已之事及報聘外、不許遣使、而於上項諸島之主厚往薄來、以悦其心」。(『朝鮮世宗実録』十一(一四二九)年十二月乙亥条)
- 41) ちなみに清代の「日本論」には豊臣秀吉と良懷は出現してくるが、足利氏歴代は登



場しない。

- 42) 浜中前掲論文六〇頁。
- 43) 浜中前掲論文においても『倭人』は夥しくて数えきれないほどであるが、『日本人』はごく稀である(五九頁)とある。
- 44) 拙稿「初期日明関係における国際秩序の構築と挫折」(『新しい歴史学のために』二一〇号、一九九三年)。
- 45) 『蜷川家文書』二十八号文書(四)細川持之奉書案。
- 46) 『建内記』永享十二(一四四〇)年二月二十九日条。
- 47) 佐伯弘次「永享十二年少弐嘉頼赦免とその背景」(地方史研究協議会編『異国と九州』雄山閣出版、一九九二年)。
- 48) 『満濟准后日記』永享六(一四三四)年二月三十日条。
- 49) 『満濟准后日記』永享六(一四三四)年六月十七日条。
- 50) 原因は不明であるが史料によれば足利義教の葬儀に出なかったことを大内教弘から讒訴されたためだという。
- 51) 『朝鮮王朝世宗実録』二(一四二〇)年十月丁卯条。
- 52) 『朝鮮王朝世宗実録』二十三(一四四一)年十二月乙未条。
- 53) 須田牧子「室町期における大内氏の対朝関係と先祖観の形成」(『歴史学研究』七六一、二〇〇二年)において、盛見から持世にかけての間には大内氏と朝鮮との通交が途絶えており、その理由として大内氏と少弐氏の戦争を一因としてあげている。その一方で「朝鮮はこの時期、日本への使者の往来を通じて大内氏の実力を評価し、倭寇制圧・通交統制に大内氏の力を期待するようになっていた」と述べている(四頁)。
- 54) 『朝鮮王朝世宗実録』十八(一四三六)年十二月丁亥条。
- 55) 『朝鮮王朝世宗実録』二十四(一四四二)年六月甲辰条。
- 56) 長節子『中世国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館、二〇〇二年)七頁。
- 57) 関德基『東アジアのなかの韓日関係』(早稲田大学出版部、一九九四年)七頁。
- 58) 『朝鮮王朝文宗実録』元(一四五一年)年八月己丑条。
- 59) 『建内記』嘉吉三(一四四三)年六月二十三日条。「日本国王与友婿大内殿、謀殺阿可馬豆。阿可馬豆知之、伏壮士於其家、請王及大内殿置酒、酒三五行、故縱悍馬於庁後、以補逸馬為辞、因閉門伏発、遂弑王。大内殿、踰垣而走。乱兵追撃之。大内殿逃帰其家、擁兵自衛、尋死。王長子嗣位。時年十二歳。大内殿堂姪亦襲後。王外舅山知温摂政、領兵三万、討阿可馬豆。」というのが朝鮮側の嘉吉の乱に関する認識である。背景はかなり脚色や誤認が多いが、「伏壮士於其家、請王及大内殿置酒、酒三五行、故縱悍馬於庁後、以補逸馬為辞、因閉門伏発、遂弑王」という「阿可馬豆」の口口については正確である。
- 60) 橋本雄氏(『歴史学研究』七五八号、二〇〇二年)や関周一氏(『日本歴史』六三〇号、二〇〇〇年)は李著作に対する書評の中で十四世紀まで倭寇討伐に精を出していた少弐氏が倭寇に転じることに疑問を感じているが、私はこの点はそれほど疑問

- に感じていない。むしろ浜中氏の書評(『歴史評論』六〇三号、二〇〇〇年)のように高麗末期の倭寇には少弐氏や征西府が兵糧米の確保のために高麗を襲った、と考えることに部分的に同調する。「部分的に」というのは関氏や橋本氏のように、少弐氏などに限定されない多様な勢力に着目すべきだとも考えているからである。
- 61) もちろん倭寇のすべてであるいは主流が少弐氏であったということを主張するつもりはない。とうぜん倭寇の担い手は多元的であり、少弐氏はその一部に含まれていた可能性をここでは主張したいのである。
- 62) 『満濟准后日記』永享三(一四三一)年五月十二日条。
- 63) 浜中前掲論考五七頁。
- 64) 川添昭二『九州中世史の研究』(吉川弘文館、一九八三年)一二二~一二三頁において氏は少弐氏没落の原因について「行政官僚的性格」と「九州探題と競合対立を与儀なくせざるを得ない位置」そして「貿易の利(鎌倉前期の海寇禁圧をてこととする貿易権の把持から、南北朝時代に入っては、むしろ倭寇諸勢力を基盤にふまえようとしていたようである)に過重に依存していたこと」による「守護大名への成長」の失敗にあり、結局は「帰るべきところを失った渡り鳥に終らざるを得なかった」点に求めている。特に氏が少弐氏と倭寇の関係について述べている点は李氏の説とも一致するものであろう(李著作一五三頁)。
- 65) 高橋公明氏の「まずは民族名を鵜呑みにしないところからはじめたい」(前掲高橋「海域世界の交流と境界人」三六八頁)という提言に従いたい。
- 66) 『満濟准后日記』永享四(一四三二)年三月十六日条。
- 67) 『満濟准后日記』永享四(一四三二)年十一月十五日条。
- 68) 本郷和人「『満濟准后日記』と室町幕府」(五味文彦編『日記に中世を読む』吉川弘文館、一九九八年)二三二頁。
- 69) 村井章介「地域と国家の視点」(『新しい歴史学のために』二三〇・二三一合併号、一九九八年)二頁。